第６章　教育の成果と教育の質の向上

本章では、本学部／大学院（研究科）の学位授与状況と進路状況についてまとめる。また、教育の評価や 3 ポリシーの達成状況の検証のために実施している授業評価アンケート、修了時アンケート、修了 3 年後アンケートなどについても簡単に述べる。

6-1. 学位授与の状況

（学部）

学士の学位は、全学共通科目と農学部専門科目について、所定の単位数を修得した者に与えられる（第 5 章参照）。本評価期間中（3 年間）に、934 名の卒業生を送り出している〈表 6-1〉。なお、過去 8 年間（平成 21～28 年度）の卒業生の学位取得率を入学生数（平成 18～25 年度）から算出すると、98%である。

（大学院）

修士の学位は、専攻科目について、所定の単位数を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に与えられる（第 5 章参照）。修士論文の審査は、高い水準を保つべく内容が吟味されている。本評価期間中に、885 名の修了生を送り出している〈表 6-1〉。なお、過去 8 年間（平成 21～28 年度）の修了生の学位取得率を入学生数（平成 18～25 年度）から算出すると、93%である。また、大部分の学生が正規の年限（2 年）で課程を修了している。

博士（課程）の学位は、博士後期課程における 3 年間の研究指導を受け、かつ博士論文の審査に合格した者に与えられる（第 5 章参照）。本評価期間中に、163 名の博士（課程）を輩出している〈表 6-1〉。なお、過去 8 年間（平成 21～28 年度）の博士後期課程編入学者の学位取得率を入学生数（平成 18～25 年度）から算出すると、75%である。また、大部分の学生が正規の年限（3 年）＋2 年以内で博士の学位を取得している。なお、本研究科には、論文博士の制度もあり、本評価期間中に、54 名の博士（論文）を送り出している。なお、論文博士の審査基準は、課程博士の審査基準に準じている。

学生の修士論文や博士論文の内容は、本研究科から発表される学術論文の主要部分を構成する場合が多く、本研究科のすばらしい研究業績を支えている。このことは、高いレベルの研究の遂行と優れた教育が両立していることを意味している。

［分析評］

適切な評価体制に基づいて内容の水準に十分配慮した学位授与が行われ、多くの学位取得者を持続的に社会に送り出している。

［資料］

○農学部学生便覧　○農学研究科学修要覧　○博士学位論文取扱内規

6-2. 卒業・修了者の進路状況

（学部卒業者）

本評価期間中のデータによると、卒業生の 76～83%が大学院に進学し、12～20%が就職する。なお、就職先・職種は、多種多様であり、本学部全体の一定の傾向を把握するのは難しい。これは、農学が広い学問領域をカバーしていることも要因の一つであると思われる。

（修士課程修了者）

本評価期間中のデータ<表 6-2>によると、修了生の 77～83%が企業などに就職（主に、技術職、研究職）し、博士後期課程に進学するのは 13～15%である。

（博士後期課程修了者・研究指導認定退学者）

本評価期間中のデータ<表 6-3>によると、博士後期課程修了者・指導認定退学者の 52～75%が就職している。これは、博士後期課程修了直後に、直ちに定職に就くのがやや難しい状況を示していると言える。

［分析評］

多数の学部卒業生が、専門領域の深い知識を得るために大学院に進学し、修士課程、あるいは博士後期課程で研鑽を積んだ後、主に研究者、技術者として社会で活動している。本研究科/学部の人材養成の目的を実現できており、満足のいく成果が挙がっている。

6-3. 教育の質の向上への取組み

6-3-1. 授業アンケート

毎学期ごとに、学部および大学院で、学部および大学院授業評価アンケートを実施している（章末の参考資料参照）。なお、平成 26 年度後期（学部）、平成 27 年度前期（大学院）から、紙媒体ベースのアンケート調査から Web システムのアンケート調査へ移行している。なお、授業評価アンケート調査結果は、学部／大学院全体（全授業科目）、学科／専攻別、個々の授業科目別でまとめている。以下に、平成 28 年度の学部および大学院授業評価アンケート（全授業科目）の調査結果の抜粋を以下に示す。

（平成 28 年度学部授業評価アンケート結果（学部全授業科目）（抜粋））

Q1. 授業の出席状況

A: 全部出席（49.2%）、B: 1 回欠席（22.6%）、C:2 回欠席（13.4%）、D:3 回欠席（9.0%）、E: 4 回以上欠席（5.8%）

Q2. 当該科目に係る予習・復習・宿題・課題等を行った合計の時間（週平均）

A: 2 時間以上（7.5%）、B: 1 時間以上（12.8%）、C:30 分以上（21.0%）、D:30 分未満（40.9%）、E: 学修していない（17.7%）

Q5. シラバスの情報は十分なものでしたか

A: はい（97.0%）、B: いいえ（2.4%）

Q8. この授業の内容はよく理解できた
A: そう思う（59.6%）、B: どちらとも言えない（32.0%）、C:そう思わない 8.1%）
Q9.　この授業はよく準備されており、体系的であった。
A: そう思う（78.0%）、B: どちらとも言えない（17.6%）、C:そう思わない 4.2%）
Q12.　質問や意見を述べる機会が与えられ、それらに適切に対応していた。
A: そう思う（62.7%）、B: どちらとも言えない（28.6%）、C:そう思わない 8.1%）
Q13.　授業に対する教員の熱意を感じた。
A: そう思う（76.5%）、B: どちらとも言えない（19.3%）、C:そう思わない 3.5%）
Q14. この授業で知的に刺激された
A: そう思う（73.5%）、B: どちらとも言えない（20.1%）、C:そう思わない 5.8%）
Q15.　この授業は自分の学習にとって有益だった
A: そう思う（79.6%）、B: どちらとも言えない（15.5%）、C:そう思わない 5.8%）

本授業評価アンケートによれば、多くの学生が授業で知的に刺激され、授業が自分の学習にとって有益であったと回答している。ただし、「当該科目に係る予習・復習・宿題・課題等を行った合計の時間」＝「授業のために自主的に学習した時間」は、全般的に非常に短く、自学自習を尊重する本学の方針が十分に学生に浸透していないことがわかる（単位の実質化の問題がある）。また、授業科目によって、学生の満足度にバラツキがある傾向も多少認められる。

（平成 28 年度大学院授業評価アンケート結果（大学院全授業科目）（抜粋））

Q1.　授業の出席状況
A: 全部出席（54.7%）、B: 1 回欠席（24.0%）、C:2 回欠席（12.3%）、D:3 回欠席（6.1%）、E: 4 回以上欠席（2.8%）
Q2. 当該科目に係る予習・復習・宿題・課題等を行った合計の時間（週平均）
A: 2 時間以上（23.5%）、B: 1 時間以上（28.5%）、C:30 分以上（16.2%）、D:30 分未満（17.9%）、E: 学修していない（13.4%）
Q5.　シラバスの情報は十分なものでしたか
A: はい（91.1%）、B: いいえ（7.8%）
Q8. この授業の内容はよく理解できた
A: そう思う（81.6%）、B: どちらとも言えない（13.4%）、C:そう思わない 4.5%）
Q9.　この授業はよく準備されており、体系的であった。
A: そう思う（84.9%）、B: どちらとも言えない（12.3%）、C:そう思わない 2.8%）
Q12.　質問や意見を述べる機会が与えられ、それらに適切に対応していた。
A: そう思う（85.5%）、B: どちらとも言えない（11.2%）、C:そう思わない 3.4%）
Q13.　授業に対する教員の熱意を感じた。

A: そう思う（86.6%）、B: どちらとも言えない（11.2%）、C:そう思わない 2.2%）
Q14. この授業で知的に刺激された
A: そう思う（84.4%）、B: どちらとも言えない（10.1%）、C:そう思わない 5.0%）
Q15. この授業は自分の学習にとって有益だった
A: そう思う（84.9%）、B: どちらとも言えない（11.2%）、C:そう思わない 3.9%）

大学院の授業科目では、少人数教育の場合が多く、履修学生の興味と授業科目の内容が合致していることもあり、全体的に、学部授業評価アンケート結果と比較して、学生の満足度が高くなっており、「授業のために自主的に学習した時間」につても、改善が認められる。

（授業評価アンケート結果のフィードバック）
学部／大学院授業評価アンケート結果は、個々の授業担当教員に開示され、各教員はそれぞれの授業科目の内容改善に取り組んでいる。また、本アンケート調査結果とは別に、各学科教授会や各専攻教授会で、カリキュラムの検証・見直しの実施、FD 委員会で、具体的な教育改善方法の検討などを行っている。

[分析評]
全般に学生の授業に対する満足度は高く、特に実験実習科目は高く評価されている。カリキュラム･ポリシーに掲げる項目のうち「実験、実習を特に重視する」姿勢が成果を挙げている。本学の教育の基本理念として「対話を根幹とした自学自習を促す」ことを挙げているにもかかわらず自主的に学習する時間が短く、学生に自学自習の態度があまり身についていないのは、理念の実現という観点からの成果が十分に挙がっていないことを示している。今後は、積極的に自主学習を促すような指導の徹底と、セメスターあたりの修得単位制限の設置などの可能性も含む改善が必要である。
[資料]
○平成 28 年度学部授業評価アンケート結果　○平成 28 年度大学院授業評価アンケート結果

6-3-2. 修了時アンケート

修士課程、および博士後期課程修了者の修了時（毎年 2 月）に、修了時アンケートを実施している（章末の参考資料参照）。以下に、平成 28 年度の修了時アンケートの調査結果を示す。なお、平成 28 年度の修了時アンケートでは、回収率（修士課程修了者：80.4%、博士後期課程修了者：74.5%）で回答を得ている。

（教育・研究などに関する評価）
教育・研究・設備・サポート体制関係項目の調査結果を〈表 6-4〉にまとめる。配点（4 点：十分に満足している、3 点：満足している、2 点：あまり満足していない、1 点：全く満足し

ていない）に対して、各項目の平均点は、カリキュラム・授業科目構成（3.2 点）、授業科目内容（3.2 点）実験・実習科目内容（3.4 点）、学位論文指導体制（3.3 点）、進路指導・就職サポート（3.0 点）、経済的支援・研究旅費等支援（3.0 点）、教務事務サポート（3.3 点）、教室・教育設備（3.4 点）であった。全項目とも、概ね良好な結果が得られているものの、進路指導･就職サポートと経済的支援･研究旅費等支援の両項目が若干低い傾向が認められた。両項目については、今後、検討を要する項目である。

また、自由記述による回答により、学生の具体的な要望、たとえば、証明書発行機の不具合、他専攻開講科目の履修の利便性の改善、隔年度開講科目の是正、各授業科目への要望、英語講義に関する要望、研究指導の個別の問題、奨学金の情報提供不足、就職サポートの要望、遠隔キャンパスの移動の問題などが挙げられていた。

（ディプロマ・ポリシーの達成度の検証）

ディプロマ・ポリシーの達成度に関する調査結果を〈表 6-5〉にまとめる。配点（4 点：十分に到達している、3 点：到達している、2 点：あまり到達していない、1 点：全く到達していない）に対して、ディプロマ・ポリシーの各項目の平均点は、修士修了生と博士後期課程修了生ともに、3.1～3.2 点であり、概ね良好な結果を得ている。しかしながら、「あまり到達していない」＋「到達していない」とする学生が、修士修了生と博士後期課程修了生ともに、約 1 割おり、各分野における研究指導教育体制のさらなる強化が望まれる。

（博士後期課程への進学に関する調査）

修士課程修了者に、博士後期課程に進学する理由と進学しない理由を聞いた調査結果を〈表 6-6〉にまとめる。進学しない理由として、博士後期課程修了後の将来の不安、経済的な理由、大学等の研究職の魅力の低さなどが挙げられる。これは、本研究科の問題ではなく、一般的に考えられている日本の大学の構造的な問題でもある。進学する場合、進学しない場合ともに、「途中で気が変わった」と回答する学生が多少おり、博士後期課程学生の確保の対策として、修士課程における魅力ある研究活動が重要な要因であることも伺える。

6-3-3. 修了 3 年後アンケート

修士課程、および博士後期課程修了者の修了 3 年後に、修了 3 年後アンケートを実施している（章末の参考資料参照）。以下に、平成 28 年度の修了 3 年後アンケートの調査結果（平成 24 年度修了者が対象）を示す。なお、本調査では、回収率（修士課程修了者：61.2%、博士後期課程修了者：65.0%）で回答を得ている。

（調査結果）

Q2. 本学の学習により身についた、卒業後に役立った能力

修士課程修了者では、専門的知識と技術（21.8%）、コミュニケーション能力（13.5%）、

たくましさ（問題解決力）（12.8%）、幅広い教養・知識（10.9%）の順であった。一方、博士後期課程修了者では、専門的知識と技術（18.8%）、幅広い教養・知識（15.9%、たくましさ（問題解決力）（12.8%）、国際性（10.1%）、実行力（10.1%）の順であった。

Q3.　本学の学習で良かったところ

修士課程修了者では、国際性（22.6%）、リーダーシップ（21.4%）、協調性（13.1%）、自己管理能力（11.9%）の順であり、博士後期課程修了者では、国際性（19.0%）、協調性（19.0%）、倫理観（19.0%）が挙げられていた。

[分析評]

本学の学習により身についた、卒業後に役立った能力として、専門的知識と技術、幅広い教養・知識が上位に挙げられており、本研究科の教育が一定の成果をあげていることがわかる。

[資料]

〇修了 3 年後アンケート調査結果

6-3-4.　FD 研修会

本研究科／学部では、教員の教育能力の向上を図るべく、FD 研修会（年 1 回）を開催している。本評価期間内に開催した FD 委員会は下記の通りである。

平成 26 年度　FD 研修会（H26-11-12）

講師：　あわの診療所 粟野院長（農学部学生相談室非常勤講師）

題目：「学生相談室の事例と対応例」

平成 27 年度　FD 研修会（H27-12-11）

講師：　上村雄彦 先生　（横浜市立大学　学術院国際総合科学群 教授）

題目：「地球規模課題の原因と処方箋を探求する

—グローバル・タックスの可能性を中心に」

平成 28 年度　FD 研修会（H29-03-02）

講師：　松川昭博 先生　（岡山大学副理事）

題目：「岡山大学の取組「教育改新、学びの強化」」

6-3-5. 教育支援者や教育補助者の研修など

技術職員研修会や全学教育シンポジウム（9 月開催、教員と事務職員対象）に積極的に、教職員を派遣している。また、平成 26 年度から、TA の事前ガイダンス制度（とくに、研究者倫理や雇用倫理の指導など）も導入されている。

［分析評］

教育支援者、教育補助者に対する質の向上については、技術系職員の定期的な研修、シンポジウム等への積極的な参加、TA への研修の実施などが行われ、適切な取組みが行われている。

［資料］

○全学教育シンポジウム報告書　○技術系職員研修会要項　○TA 研修（平成 26 年 4 月）実施資料

6-4. 前回の外部評価における主なご指摘とその対応

○教育水準については、十分に優れた水準にあると思いますが、自己評価で示されているようにレベルの低下を懸念するのであれば、成績到達基準に客観性を持たせるよう教育評価基準を明確化して、国際的な水準にある大学と比較することも有効であると考えます。 ○学部・研究科の意志として、学部の研究と教育を推進する方向性を検討するシステムが明確ではないと思います。世界基準の教育を行うためには、学位授与の基準や各科目の単位取得のための最終目標を明確にして公表することが重要ではないでしょうか。

◎平成 29 年度にカリキュラム・ポリシーの改定を予定している。学位授与の基準、および各科目の単位取得基準のより一層の明確化（数値評価の推進）については、現在、検討中である。

○「対話を根幹とした自学自習を促す」姿勢は高く評価するが、実態とギャップがあるようである。学位論文指導体制に対する満足度は非常に高いことから「ティーチングよりもコーティング」との考えのもと、「受動的教育」から気づきを促す「参加型教育」へ シフトする必要があると考える。社会に出るとマニュアルが全くなく、「道無き道を切り開く」「段取りを自ら考える」ことが多く、そうした姿勢や能力を育む教育を期待したい。

◎大学院課程では、指導教員制度が取られ、マンツーマン体制により、教員と学生が一体となって、研究活動を実施している。その研究活動では、「新規な研究課題に取り組む」＝「道無き道を切り開く」、「課題に対する対策を立案し実行する」＝「段取りを自ら考える」が実践されており、「参加型教育」は、十分に行われていると考えている。学部生では、課題研究（卒業研究）の遂行時に、大学院生と同様に、指導教員の責任の元、研究活動を行っており、「参加型教育」が実践されていると考えている。

○就職斡旋については、“学生に熱心にアドバイスを行う姿勢ではないものの、相談すれば親身になってくれる”との学生の声を聞く。

◎平成 28 年度の修了時アンケートの進路指導や就職サポートの項目で、「十分に満足している」「満足している」の合計の比率は 73%であり高い値である。就職は、基本的には、学生個人と企業間の問題であり、両者間のミスマッチを引き起こすわけにもいかず、限界がある

のが実情ではあるが、教育・研究・サポート体制に関する設問で、若干、満足度の低い項目でもあるので、できるだけの支援を行いたいとは考えている。

○多数の者が大学院に進学し、学位取得率も高く、修士論文の質も学術論文としての投稿受理により担保されている。就職状況もよく、学生自体の教育効果への満足度が高い。今後は、博士課程への進学度を高める取り組みに期待する。

◎博士後期課程への進学度の向上は、本研究科だけの問題ではなく、日本の大学院の構造的な問題であり、即効ある対応策はないのが現状である。たとえば、大学院入試説明会の拡充、博士号取得者への企業の理解の向上への取り組み、中長期インターンシップの積極的な活用、優秀な海外留学生の確保、修士課程における研究活動の魅力度の向上などの諸政策を地道に実施する必要があると思われる。

○英語能力の向上を目指すのであれば、修士課程入試への TOEFL 等の導入が効果的ではないか？

◎平成 29 年度入学試験（平成 28 年度実施）から、１月の修士課程（一般 2 次募集）入学試験に、英語検定試験成績（TOEFL-iBT、IELTS）が導入済みである（第 5 章参照）。

○教育・指導の方法論改善策が、実効性があったとは言い難い面もあるものの、改善された教育支援システムも紹介されていることから是非バージョンアップしてもらいたい。また、卒業生の声や意見を聞く場を設け、教育や指導へ反映することも一つの改善手法であろう。

◎教育の質の向上については、授業評価アンケートや修了時アンケート調査結果をもとに、引き続き、続けられている。卒業生の意見聴取は、全学の教育評価のために実施されている外部アンケート調査もあり、その調査結果の反映を考えていきたいと考えている。

＜表 6-1＞　学部および大学院における学位授与数

	学士	修士	博士（課程修了）	博士（論文提出）
前期平均 1)	310.3	282.7	63.0	15.3
今期平均 2)	311.3	295.0	54.3	18.0
H26 年度	313	287	56	22
H27 年度	304	277	52	16
H28 年度	317	321	55	16
入学定員	300	263/303	120/90	－

1)H23～H25 年度平均

2)H26～H28 年度平均

＜表 6-2＞　大学院修士課程修了者の進路状況

	修了者	進学	就職	その他	就職先			
					研究者	技術者	教員	その他
前期平均 1)	282.7	49.7	219.3	13.7	48.3	98.0	2.0	71.0
今期平均 2)	295.0	40.7	239.0	15.3	59.0	92.0	3.7	84.3
H26 年度	287	42	222	23	47	91	4	80
H27 年度	277	38	228	11	61	86	0	81
H28 年度	321	42	267	12	69	99	7	92

1)H23～H25 年度平均

2)H26～H28 年度平均

＜表 6-3＞　大学院博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路状況

	修了者	進学	就職	その他	就職先			
					研究者	技術者	教員	その他
前期平均 1)	72.7	4.7	54.3（74.4%）	13.7	34.3	6.0	10.3	3.7
今期平均 2)	64.7	1.0	40.3（62.3%）	23.3	21.0	5.3	7.7	6.3
H26 年度	68	0	51（75%）	17	31	8	10	2
H27 年度	53	2	32（60%）	19	17	5	5	5
H28 年度	73	1	38（52%）	34	15	3	8	12

1)H23～H25 年度平均

2)H26～H28 年度平均

〈表6-4〉平成28年度修了時アンケート結果（教育・研究・サポート体制・設備関係）

設問番号	2-(1)	2-(2)	2-(3)	2-(4)	2-(5)	2-(6)	2-(7)	2-(8)
	カリキュラム・授業科目の構成	授業科目の内容	実験・実習科目の内容	学位論文の指導体制	進路指導や就職サポート	経済支援や研究旅費のサポート	教務関係の事務サポート	教室・教育設備
4 十分に満足している	107	97	125	145	89	87	124	131
3 満足している	152	158	122	111	128	139	137	145
2 あまり満足していない	31	30	20	37	69	49	29	22
1 全く満足していない	4	6	4	5	12	17	8	0
無回答	5	8	28	1	1	7	1	1
平均点	3.2	3.2	3.4	3.3	3.0	3.0	3.3	3.4

〈表6-5〉平成28年度修了時アンケート結果（ディプロマ・ポリシーの到達度）

設問番号	6-(1)	6-(2)	6-(3)	6-(4)	6-(5)	6-(6)	6-(7)	6-(8)
	修士課程修了				博士後期課程修了			
	ポリシー(1)	ポリシー(2)	ポリシー(3)	ポリシー(4)	ポリシー(1)	ポリシー(2)	ポリシー(3)	ポリシー(4)
4 十分に到達している	72	84	75	64	12	16	15	14
3 到達している	156	144	153	144	19	14	17	17
2 あまり到達していない	24	19	18	38	3	5	4	4
1 全くと到達していない	1	2	1	3	2	1	0	1
無回答	5	9	11	9	5	5	5	5
平均点	3.2	3.2	3.2	3.1	3.1	3.2	3.2	3.1

〈表6-6〉平成28年度修了時アンケート結果（複数回答）

（1）進学理由（複数回答）

設問	修士課程	
	男	女
a. 当初から博士後期課程進学の予定であった	15	6
b. 修士までの予定が途中で気が変わった	8	5
c. 十分な研究成果を挙げられなかった	2	2
d. 博士後期課程修了後の進路が安心	0	0
e. 経済的な心配がない	1	0
f. 大学等で研究職に就きたい	11	1
g. 官公庁、企業等に就職したくない	1	1
h. 就職活動に失敗した	0	0
小計	38	15
計	53	

（2）進学しなかった理由（複数回答）

設問	修士課程	
	男	女
a. 当初から修士課程までの予定であった	109	54
b. 進学予定であったが途中で気が変わった	13	5
c. 十分な研究成果を挙げられた	2	0
d. 博士後期課程修了後の進路が不安	34	14
e. 経済的な理由	32	12
f. 大学等で研究職に就く気がない	40	18
g. 官公庁、企業等で活躍したい	28	6
h. 就職活動に成功した	22	7
小計	280	116
計	396	

参考資料　　平成２８年度授業評価アンケート用紙（学部･大学院共通）

Q1. 授業の出席状況
①全部出席 ②１回欠席 ③２回欠席 ④３回欠席 ⑤４回以上欠席

Q2. 当該科目に係る予習・復習、宿題・課題等を行った合計の時間（学期を通じた１週間あたりの平均値）
①２時間以上 ②１時間以上 ③３０分以上 ④３０分未満 ⑤学修していない

Q3. シラバスを活用（使用）しましたか。
①はい ②いいえ

Q4. Q3 が「はい」の場合、活用した事柄を以下より選択してください。複数選択可
①科目選択・履修登録 ②予習・復習 ③受講に当たり授業中など ④試験・レポート ⑤その他

Q5. シラバスの情報は十分なものでしたか。（シラバス活用の有無等に係わらず回答してください。）
①はい ②いいえ

Q6. Q5 が「いいえ」の場合、不十分であった項目を以下より選択してください。複数選択可
①「授業の概要・目的」の情報 ②「授業計画と内容」の情報 ③「履修要件」の情報
④「成績評価の方法・基準」の情報 ⑤「教科書」及び「参考書等」の情報 ⑥「その他」の情報
※選択肢⑥については２段目の１にマーク

Q7. シラバスに則した講義が行われていましたか。
①はい ②いいえ

Q8. この授業の内容はよく理解できた。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q9. この授業はよく準備されており、体系的であった。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q10. この授業の進行度は適切であった。
①適切である②早すぎる ③遅すぎる

Q11. 教科書やプリント、黒板やプロジェクターを用いた説明の仕方や話し方は適切であった。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q12. 質問や意見を述べる機会が与えられ、それらに教員は適切に対応していた。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q13. 授業に対する教員の熱意を感じた。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q14. この授業で知的に刺激された。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q15. この授業は自分の学習にとって有益であった。
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q16. 自由設問１ アンケート配布の際に教員が口頭で指示
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

Q17. 自由設問２ アンケート配布の際に教員が口頭で指示
①そう思う ②どちらともいえない ③そう思わない

参考資料　　平成２８年度　修了時アンケート用紙

農学研究科の今後の教育改善に資するためのアンケート調査です。率直なご意見をお聞かせください。

［アンケート結果は農学研究科内で大学院教育検証のための資料として活用させていただきますが、それ以外の目的では使用いたしません。また、集計結果はホームページ等で公表することがあります。］

１．回答者について

所属専攻、課程、性別等について、該当するものを選択してください。

（1）所属専攻

ａ．農学専攻　　ｂ．森林科学専攻　　ｃ．応用生命科学専攻　　ｄ．応用生物科学専攻

ｅ．地域環境科学専攻　　ｆ．生物資源経済学専攻　　ｇ．食品生物科学専攻

（2）課程

ａ．修士課程　　ｂ．博士後期課程

（3）性別

ａ．男　　ｂ．女

（4）出身大学・学部

ａ．京都大学農学部　　ｂ．京都大学他学部　　ｃ．他大学

（5）修了後の進路

ａ．進学　　ｂ．就職　　ｃ．未定・その他

２．農学研究科の教育・研究、設備、サポート体制について

下記の質問項目について、１～４の評価のうち該当するものを選択してください。

※（1）から（3）は他大学大学院の修士課程出身者は回答不要です。

≪４ 十分に満足している　３ 満足している　２ あまり満足していない　１ 全く満足していない≫

（1）修了した専攻におけるカリキュラム・授業科目の構成	4	3	2	1
（2）修了した専攻開設の「授業科目」の内容	4	3	2	1
（3）修了した専攻に「実験・実習科目」があればその内容	4	3	2	1
（4）修了した専攻・分野における学位論文の指導体制	4	3	2	1
（5）修了した専攻・分野における進路指導や就職サポート	4	3	2	1
（6）在学中の経済支援（奨学金等）や研究旅費等のサポート	4	3	2	1
（7）教務関係の事務的なサポート	4	3	2	1
（8）教室・教育設備	4	3	2	1

※上記（1）から（8）で２または１と回答された場合、具体的にはどのようなことですか。

［　　］

３．農学研究科の教育についてのご意見を、下記の欄に自由にご記入下さい。

（1）農学研究科の教育で良かった点

（2）農学研究科の教育で今後改善を要する点

（3）その他

【次の質問は修士課程修了で進路が「進学」の方のみお答えください】

4．博士後期課程に進学する理由は何ですか？該当するものを選択してください。（複数回答可）

a．当初から博士後期課程進学の予定であった　b．修士までの予定であったが途中で気が変わった
c．十分な研究成果を挙げられなかった　d．博士後期課程修了後の進路が安心
e．経済的心配がない　f．大学等で研究職に就きたい　g．官公庁、企業等に就職したくない
h．就職活動に失敗した
i．その他

【次の質問は修士課程修了で進路が「就職」「未定・その他」の方のみお答えください】

5．博士後期課程に進学しなかった理由は何ですか？該当するものを選択してください。（複数回答可）

a．当初から修士課程までの予定であった　b．進学予定であったが途中で気が変わった
c．十分な研究成果を挙げられた　d．博士後期課程修了後の進路が不安　e．経済的理由
f．大学等で研究職に就く気がない　g．官公庁、企業等で活躍したい　h．就職活動に成功した
i．その他

6．農学研究科における学位授与の方針の到達確認（ディプロマ・ポリシー）

下記の質問項目について、1～4の評価のうち該当するものを選択してください。
≪4 十分に到達している　3 到達している　2 あまり到達していない　1 全く到達していない≫

【次の質問は修士課程修了の方のみお答えください】

（1）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（1）「生命現象のメカニズム、生物の生産と利用、地域のレベルから地球規模に至る環境保全、人類の食料問題等に関する高度な専門知識と研究技術を習得している。」

4　3　2　1

（2）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（2）「それぞれの専門領域において独創性の高い科学を担い、画期的な技術革新を実現したり、社会の発展を持続させるためにとるべき施策を提起することを自らの使命と感じている。」

4　3　2　1

（3）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（3）「それぞれの専門あるいは関連する

領域の研究者に自らの研究成果をアピールし、相互に理解を深めるためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力をもっている。」

4　3　2　1

（4）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（4）「研究成果を世界に向けて発信するために必要なレベルの語学能力を身につけている。」

4　3　2　1

【次の質問は博士後期課程修了の方のみお答えください】

（1）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（1）「それぞれの専門領域における深い学識と高度な実験技術・分析能力を備えている。またその学識と技術・能力を基盤として独創的な課題・テーマを設定し、自ら、それを解決・展開できる。さらにその成果を論文化する能力を有している。」

4　3　2　1

（2）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（2）「必要に応じて他研究機関との共同研究を企画・実施できる能力を身につけている。」

4　3　2　1

（3）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（3）「生命や社会現象に対する深い理解に基づいた高度な倫理性と、バランス感覚を身につけている。」

4　3　2　1

（4）農学研究科における学位授与の方針（ディプロマポリシー）（4）「人や自然との調和ある共存と秩序ある人類の繁栄の維持に貢献できる。」

4　3　2　1

ご協力ありがとうございました。

以上

参考資料　　平成２８年度　修了３年後アンケート用紙

（平成２４年度修了者（農・修士課程・博士後期課程修了者　共通））

Q.01　あなたの現在の職（身分）についてお答えください。
A. 学生（京都大学）
B. 学生（他大学）
C. 社会人（就労者（非正規雇用を含む））
D. 社会人（非就労者）
F. その他（記述回答）

Q.02　本学での学習により身についた、卒業後に役立った能力を以下より選択してください。（複数選択可）
A. 幅広い教養・知識
B. 専門的な知識と技術
C. 国際性（外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力）
D. 企画力、創造的思考力
E. 実行力
F. 協調性（チームワーク）
G. コミュニケーション能力
H. リーダーシップ
I. たくましさ（問題解決力）
J. 自己管理力
K. 倫理観
L. その他（記述回答）

Q.03　本学での学習について、特にどのようなところが良かったかなどについて、自由に記載願います。

Q.04　本学での学習では身につかなかった能力を以下より選択してください。（複数選択可）
A. 幅広い教養・知識
B. 専門的な知識と技術
C. 国際性（外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力）
D. 企画力、創造的思考力
E. 実行力
F. 協調性（チームワーク）
G. コミュニケーション能力
H. リーダーシップ
I. たくましさ（問題解決力）
J. 自己管理力
K. 倫理観
L.　その他（記述回答）

Q.05　本学での学習について、特にどのようなところが不満もしくは改善を要すると感じたかなどについて、自由に記載願います。